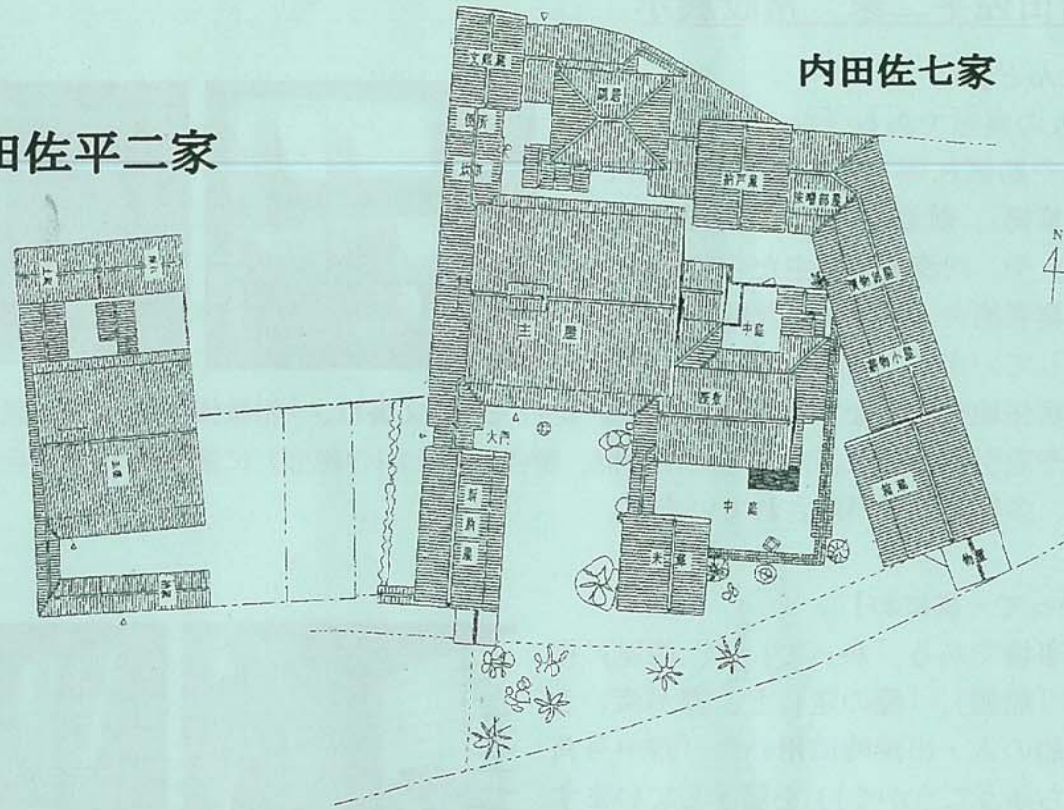


# 尾州廻船内海船船主内田家（佐平二家）

敷地面積	871.3㎡（5筆）
延床面積	285.9㎡（5棟）
建築年	明治5年頃（推定）
修復工事	平成23年度、平成25年度、平成26年度
総事業費	65,849千円（工事費、設計監理費）

内田佐平二家



内田佐七家

## 【内田佐平二家とは】

初代の佐造は、文政5（1822）年に知多郡中須の大岩仁右衛門の二男として生まれ、幼名を豊吉といました。いつの頃からか内田佐七家の廻船に乗り込み、弘化2（1845）年には観徳丸船頭としてその名を現わしています。その後内田家の持ち船の船頭を歴任し、船頭として最後の航海となる安政2（1855）年の隠岐への航海までの間10年余りを無事故で乗り切ったことは、豊吉が船乗りとして相当の力量を持っていたことを物語っています。その後、豊吉は安政年間に矢野（現津市内）に店を構え、内田家の廻船経営を支えました。佐造は矢野店で干鰯の販売や酒造などにより大きな収益を上げましたが、明治維新後の明治5（1872）年に矢野店を閉め内海に帰郷し、内田佐七家では西側に隣接する敷地を佐造の屋敷地とし、家を新築しました。

豊吉（佐造）は、初代佐七の娘こうの夫として迎えられ、嘉永7（1854）年には二人の間に長男新之丞が生まれました。この新之丞は二代目内田佐七に子がなかったために内田佐七家の養子となり、三代目佐七を襲名しました。そして、三代目佐七と妻りつの間に来た長男佐太一が四代目佐七となり、一方、二男佐平二が佐造の養子となり、新屋の二代目となりました。

二代目佐平二には四人の子どもがいました。現在の当主は、二代目佐平二の長男の子どもです。今回公開する家屋を「内田佐平二家」としたのは、現当主から土地・家屋の寄贈があった際の希望によるものです。

平成29年7月 南知多町社会教育課



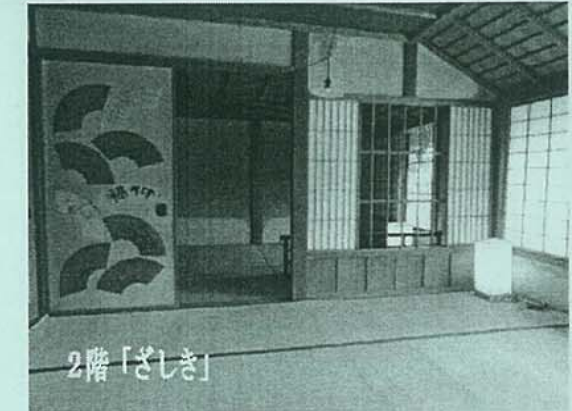
主屋外観



はなれ、土蔵



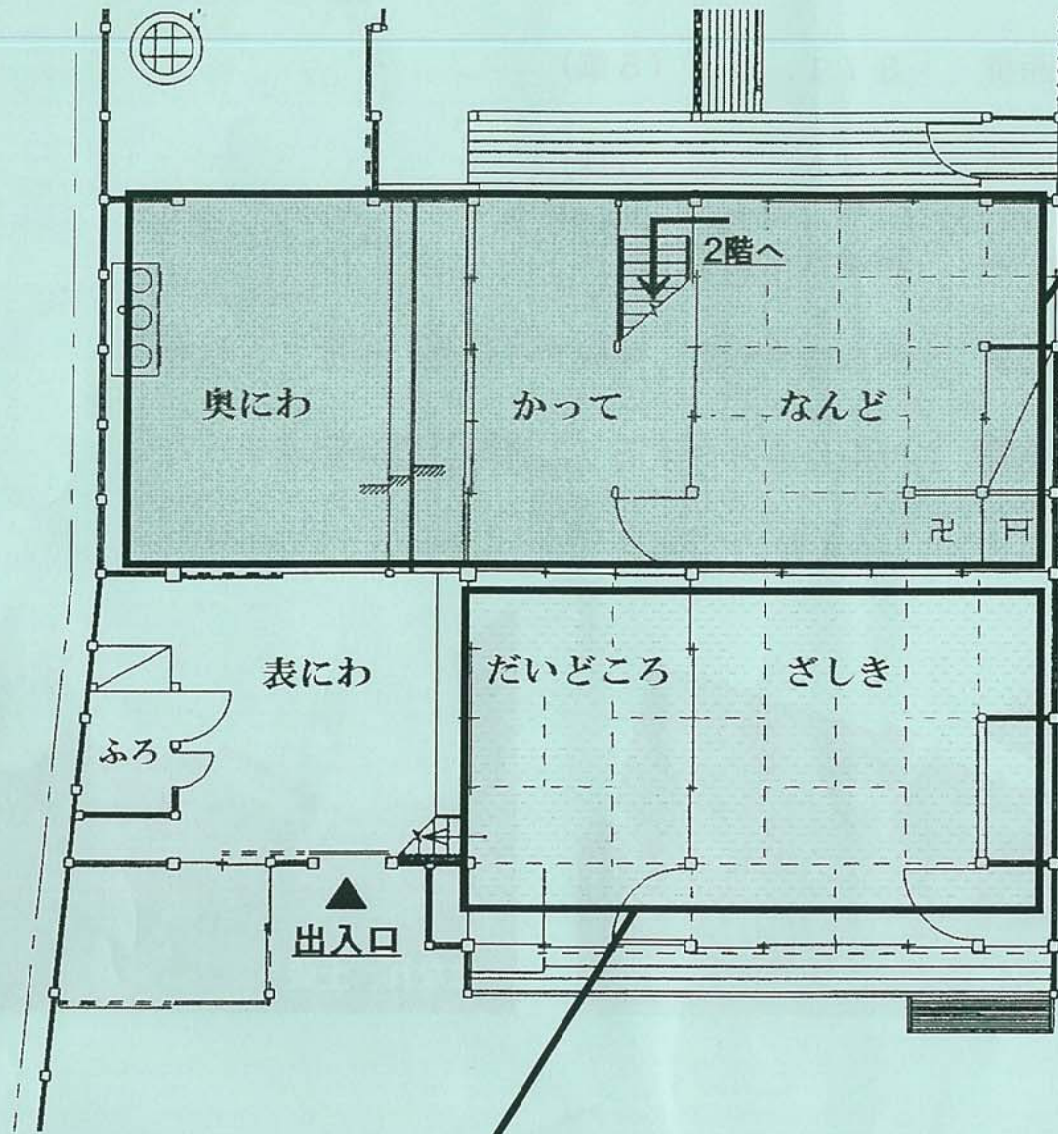
1階「ざしき」



2階「ざしき」

内田佐平二家 展示説明 (特別展示「夏のくらし」期間中)  
H29.7.8～ H29.8.27

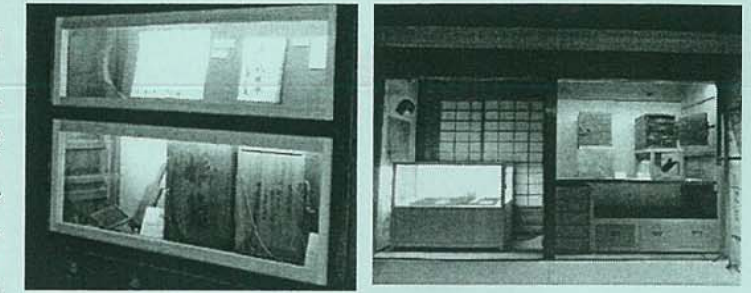
佐平二家 1階平面図



内田佐平二家 常設展示

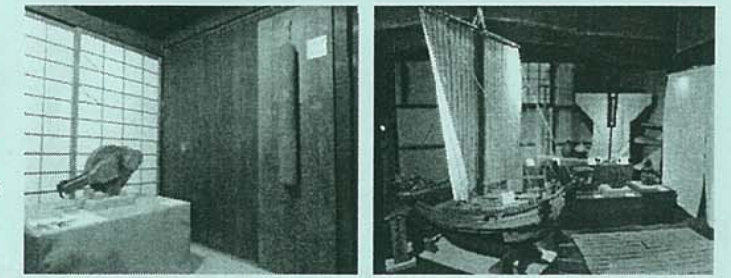
【なんど】

主人の寝室である「なんど」に、取引文書や船鑑札等貴重なものを収納した「船筆筒」、航海で用いた「船磁石」「遠眼鏡」や、内海船の船主たちで構成された同業者組合「戒講」の記録文書などを展示しています。船筆筒の底面には持ち主の居住地や氏名などが墨書されています。戒講文書は、「船数帳」のほか、諸国の相場情報や取引の記録などが記された書簡、参会（年1回の総会）に関わる記録や会計帳簿などで、多数の文書が残されています。



【かって・奥にわ】

食事場である「かって」に、船室に掲げた「船額」「鐘の尾」と、霧が深いときの船の入・出港時に用いた「霧中号角（むちゅうごうかく）」を展示しています。「鐘の尾」は、船頭がなじみの遊女からもらった縁起物です。



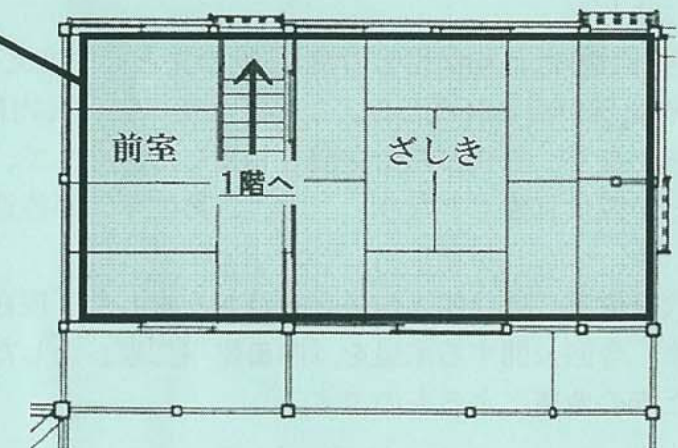
炊事や仕事場として使われる「奥にわ」には、「宝久丸」の模型 (S=1/10、幕末期 800 石積弁財船) および「船徳利」「焚きこんろ」などの船上で使われた道具類を展示しています。

【2階】

2階「ざしき」「前室」には、「千石船雛形」「板図」(板に描いた船の設計図)、船内や家の中に掲げた船札を展示しています。船の形や船主の信仰を明らかにする貴重な資料です。



佐平二家 2階 平面図



特別展示「夏のくらし」

家族の居間である「だいどころ」、神屋の前にあって主人の居間や接客のために用いられた「ざしき」は、特別展示「夏のくらし」の展示スペースとなっています。

夏の生活で実際に使われたと考えられる、佐七家所蔵の生活道具類をご覧ください。だいどころでは青磁の花器 (佐七家所蔵) に活けられた季節の花を週変わりでお楽しみいただけます。

